麦粒（ばくりゅう）

2026. Spring

麦粒／ NO. 147

発行・キリスト教センター

目　　次

「物語と現実の狭間で」 …… 上 野 玲 奈（3）

「分断と不寛容を乗り越えると題して」… 佐伯奈津子（9）

新入生の皆さんへ …… (13)

Culture & Human Resources
NAGOYA GAKUIN UNIVERSITY

「物語と現実の狭間で」

上　野　玲　奈

ナオミは言った。「御覧なさい、オルパは自分の民のもとに、自分の神のもとに帰って行きました。あなたも彼女の後を追って帰りなさい。」しかしルツは言った。

「あなたを見捨て、あなたに背を向けて帰るなど
そんなひどいことをさせないでください。
あなたが行かれる所に私は行き
あなたがとどまる所に私はとどまります。
あなたの民は私の民
あなたの神は私の神です。
あなたが死なれる所で私は死に
そこに葬られたいのです。
死に別れでなく、私があなたと別れるならば
主が幾重にも私を罰してくださいますように。」

ナオミは、ルツが一緒に行くと決意を固めているのを見て、それ以上言うのはやめた。

（ルツ記　1章15〜18節）

今日は名古屋学院大学のチャペルアワーにお招きいただきましてありがとうございます。初めてこの大学にこさせていただきました。皆さんと一緒に礼拝を捧げることができること、本当に嬉しく感謝しています。今日は、旧約聖書のルツ記を選ばせてもらいました。私の人生において、とても大切な聖書の箇所の一つを選びました。なぜ大切なのかは少し後でお話したいと思います。

ルツ記のメインキャラクターはルツ、ナオミという女性たち、そしてボアズという男性です。今日はボアズが出てくるところまでは読むことができませんが、

この３人がメインのキャラクターです。１章、ユダヤのベツレヘム出身の男性が当時住んでいた地域に食べ物がなくなってしまってモアブという土地に移り住んだというところから始まります。モアブは場所の名前ですが、モアブの人々と旧約聖書に出てくるイスラエルの人々は仲が良くありませんでした。どちらかというとイスラエルの人たちの側がモアブの人たちのことを嫌っていた、よく思っていなかったという言い方のほうが正しいかもしれませんが、ともかく仲が悪い人たちだったんです。食料がなくなったので、イスラエル、ベツレヘム出身の男性がモアブに移り住んで、そこで生活を始めました。その男性の妻がナオミさんという人です。この夫婦と２人の息子がモアブで暮らし始めます。ところがこの男性は死んでしまうんですね。２人の息子はモアブの女性たちを妻にしたんですけども、その２人の息子も死んでしまうんですね。残された３人の女性はどうしたらいいんだと、１章６節以下で話をしています。３人の女性たちの会話です。２人の女性の義理の母であるナオミさんは義理の娘たちに、もう自分たちの故郷に帰りなさいと言うんです。ところが２人は帰りたくないという態度を取ります。ナオミは、自分はもう子どもを持つには歳をとっているし、今から男の子を産んでもあなたたちの夫になるには時間がない、間に合わないというのです。どういうことか現代の私たちにとってはいまいちよくわからないんですけれども、これは、レビレート婚という当時の風習のことです。当時のイスラエルの人たちはレビレード婚という結婚のやり方をしていました。イスラエルの人たちが結婚して夫が死んだ場合、残された女性はその夫の兄弟と結婚するというやり方です。そういうわけでナオミは義理の娘たちにもう私はあなたたちの夫になる男の子は今から産めません、今産んだとしても遅いですと言っているんです。義理の娘の一人のオルパという人はナオミが自分の故郷に帰りなさいと言ったことを受けとめて、泣く泣く自分の元の家に戻る決断をします。もう十年ぐらい一緒に過ごしていたので今さら帰るのもしんどかったと思います。ところがルツの方は、どうしても離れたくないと言います。１章の14節で２人は声をあげてまた泣いたとあります。ルツはナオミに抱きついて離れなかったと書いてあります。この部分、他の聖書の翻訳だとすがりついて離れなかったとも書いてあります。ちょっと想像し

てみてください、どんなシーンでしょうか。泣いて、泣いて離れたくないと言っています。もう一度ルツの言葉を見てみますと、あなたを見捨ててあなたに背を向けて帰るなんてそんなひどいことさせないでくださいと、それからあなたの民は私の民、あなたの神は私の神、あなたが死ぬところで私も死にたい、さらには、死ぬだけじゃなくてそこに葬られたい、言い方を変えたら、一緒のお墓に入りたいと言ってるんです。ものすごい情熱的で愛情がこもった、本当にナオミのことが心から大切で、もう大好きって言ってもいいくらいの気持ちの込められた言葉なんです。

皆さんももしかしたら近い将来ご結婚なさるかもしれませんし、今お付き合いされている方にこういった愛情のこもった言葉を伝えている人もいるかもしれません。このフレーズ、まさに「死がふたりを分かつまで」というようなフレーズは、キリスト教の結婚式で使われるようなフレーズです。大変激しい愛の告白と言っても過言ではありません。この聖書の箇所は女性同士の話なんですけど、これが女性と男性だったらすごく簡単に「あ、これは好きな人に告白してる部分なんだな」っていうふうに読めるような箇所なんです。でも、女性同士であってもそういうふうに読めるよねという解釈があります。つまり、実はナオミとルツというのはレズビアンのカップルだったんだよというふうに読む解釈もあるんです。

この解釈が、私にとってはとても大事なのです。聖書は生ける神のみことばであるという言い方もしますけど、私にとって本当にそういう生ける言葉、生き生きとした言葉になったのは、聖書にもレズビアンカップルがいると読めるような解釈に出会ったときでした。その時に初めて、あ、自分も生きていけるんじゃないかって思ったのです。私は、19歳ぐらいの頃からセクシュアリティに悩んでいました。12歳の時に洗礼を受けてから長年日本の教会の礼拝に出席して日本の牧師さんたちがお話するのを聞いてきましたけれども、そういう解釈は一度も聞いたことがなかったし、それから今のようにLGBTQとかセクシュアリティとかそういう言葉は私が10代後半から20代だった頃は一切なかったです。高校まで女子校でしたのでスポーツと勉強だけに明けくれていて、さっぱり恋愛には興味がなかったんですけれども、大学に入って男女一緒の授業になり、男性が近くにいる日常

を過ごすようになりました。周りの友達がみんな男性と恋愛をしていくなかで自分は全然そういう感情がないなと、むしろ女性の方が好きなんじゃないかなというのに気づき始めました。でもその頃通っていたのは、同性愛は死刑に値する罪だというふうに聖書を解釈する教会でした。ですので、自分のセクシュアリティってなんか違うかもと思い始めた時に、目の前にサーっと暗幕が降りて、もうこれで人生が終わったという絶望的な気持ちになりました。大学時代や20代前半くらいまでは恋愛が一番楽しい時期だと思います。異性愛者であれば、将来一緒に暮らしたい人とか、結婚のことも少しずつ考えるでしょうし親にも紹介しようかなとかそういう時期だと思いますけれども、私の場合はセクシュアリティに気づいて、でも自分でもそれを受け入れられないし、誰にも言えないし、相談もできないし、大学の先生でもそんなこと（LGBTQ＋に肯定的なことなど）をいう人は一人もいなかったですし、すごく苦しい時期でした。

30代にアメリカの神学大学院に行くチャンスがあって、初めてクリスチャンでゲイの友達ができました。そのゲイの友達はたまたま陸軍所属の兵士でもあって、でもキリスト教の勉強をしているという、それもびっくりした出会いでしたけれども、とても仲が良くなった友達でした。また黒人のレズビアンの教授がいました。私はその頃まだ自分のセクシュアリティを周りに対して隠していたので、その教授にメールでこっそり自分のことを伝えたら、次の授業からですね、その先生はめちゃくちゃまっすぐに私の目を見て、「あなたはどういう風に生きて行きたい？」と繰り返し毎回の授業で言ってくださいました。それから旧約聖書の教授で、旧約聖書の教授は日本の先生たちは割とご年配の男性の先生っていうイメージが多いですし、実際そういう先生が多いと思いますけど、非常に若いレズビアンの教授が赴任してきて、その先生は女性のパートナーと一緒に、これからそのパートナーの子どもが生まれるっていう状況で学校にいらっしゃいました。そういう方に会ったのも、初めてでした。学生のなかには黒人と白人のレズビアンカップルもいましたし、一番大きかったのは、年配のレズビアンの牧師で、私のカミングアウトできない苦しみを一番理解してくれて、何度も英語で「I'm proud of you. 私はあなたを誇りに思うよ。」って言ってくれた先生との出会いでした。

日本にいた時は自分で自分を追い込むような人生を生きてきたけれども、アメリカでの出会いを経て、自分の物語を生きて行きたいって思うようになりました。今日のこのルツ記の話に戻ると、このルツさんという人は、当時の習慣にしたがえば、本当はレビレート婚で夫の兄弟と結婚しなきゃいけない、あるいはナオミが帰れというんだから自分の故郷に帰らなきゃいけない、そういう状況だったかもしれないです。でも、いや、それはしたくないと、ナオミさん、あなたについて行きたいんです、私はこういう風に生きて行きたい、そして、私はあなたをこんなに愛しているんですというふうにルツが決断した瞬間が今日の聖書の箇所です。これほどまで深い愛情で相手に想いを伝えている場面は、聖書の中でもそんなにたくさんないらしいです。このルツの大きな決断は、自分で自分らしく自分の物語を生きて行くっていう決断ですし、自分が本当に大切に思う人に相手が女性だろうが男性だろうが、そうであろうがなかろうが、どんなセクシャリティであっても相手を愛する想いを伝えていっていいんだというふうに読める場面です。この解釈があまりに新しすぎて、そうではない解釈に慣れてきたので、私自身、そういう風に読んでいいんだという思いに至るまでにも時間がかかりました。でもそういう解釈があるんだと知った時に、本当に嬉しかったし、そういうふうに読みたいなというふうに思いました。

皆さんが今どういう大学生活を歩んでおられるかわからないんですけれども、私の場合は国立の大学受験に失敗してしまって私立大学に行きました。でもその私立大学に行ったおかげで全く別の道を選ぶようになっていって、牧師になりました。自分の人生を選んでいく場面が、皆さんにもこれからたくさんあると思います。そんな時にぜひ今日のルツの選択をもしよかったら思い出してほしいのです。ルツは、私はこういう風に生きて行きたいと自分の物語を自分で選び取って行きました。実はこの後もルツ記は結構面白くて、４章までしかないのでお時間があるときに読んでみてほしいんですけど、ナオミとルツが協力して生き抜いて行くサバイバル的な話です。ボアズとの出会いの解釈など結構面白いのでもしよかったら読んでもらいたいのと、解釈の解説が必要だったら近くのキリスト教の先生とかに教えてもらうとますます面白いと思います。ルツのように自分で自分の物語を選んでいく、自分の人生を作っ

ていく力は、皆さんも私も誰もが持っていると思います。今の現実と自分の望む選択があまりにも違いすぎることもあるかもしれません。そして行きたい道じゃなかったのになあと思うこともきっとあると思います。なかなか思い通りにはいかない現実と自分の生きて行きたい物語のはざまで苦しみつつ、それでも私はこういう風に生きて行きたいという思いをぜひ大切にしてもらいたいなと思っています。社会にある習慣とか、皆さんをよく知らない大人や政治家や宗教や、社会の仕組みいろんなものが、大きな物語を押し付けてくることがあるかもしれません。そんな時にこそ、自分自身に戻って、自分はどういう風に生きて行きたいのかを大切にしてほしい、そして、決断をするときは、本当にそれは相手を愛していく決断なのか、相手を大切にする決断なのかをぜひ考えていただければいいなと思うんです。ルツのように、相手を本当に愛して大切にしてこれから生きて行きたい、そういう決断をするひとりひとりが、今の日本や世界に求められてるんじゃないかなと思っています。誰かを憎んだり、悪者にしたり、暴力的な力で支配したりするのではなくて、お互いに自分らしく生きるために相手を大切にしていく、そういう物語をご一緒に紡いでいけたらいいなと思っています。

（うえの　れいな　日本基督教団部落解放センター主事　2025.10.28　しろとりチャペルアワー奨励）

「分断と不寛容を乗り越えると題して」

佐　伯　奈津子

「あなたがたは地の塩である。だが、塩に塩気がなくなれば、その塩は何によって塩味が付けられようか。もはや、塩としての力を失い、外に投げ捨てられ、人々に踏みつけられるだけである。あなたがたは世の光である。山の上にある町は、隠れることができない。また、灯をともして升の下に置く者はいない。燭台の上に置く。そうすれば、家にあるすべてのものを照らすのである。そのように、あなたがたの光を人々の前に輝かせなさい。人々が、あなたがたの立派な行いを見て、天におられるあなたがたの父を崇めるようになるためである。」

（マタイによる福音書　5章13〜16節）

平和を願うチャペルアワーの奨励に際して、実はとても緊張しております。何をお話しすればいいのか考えて、書いてみては消し、書いてみては消しというのを繰り返しておりまして、最終的にはまとまりのない、とりとめのない話になってしまっているような気もしますが、みなさん、おつき合いいただければと思います。

今年は2025年、21世紀も１／４が過ぎました。1945年に第二次世界大戦、もしくはアジア太平洋戦争が終結し、80年目になります。20世紀は戦争の世紀と呼ばれた世紀でした。二つの世界大戦がありましたし、それに続く東西冷戦中も、対立する東西が核武装を拡張するなか、もし第三次世界大戦が勃発したらどうなるのだろうかという不安をもって、わたし自身、子ども時代を過ごしておりました。だからこそ1990年代はじめに東西冷戦が終結し、人びとは21世紀こそ平和の世紀にするのだという決意を新たにしたのでした。

では、現在わたしたちは、平和な社会で暮らしているといえるでしょうか。たしかに、80年間「世界大戦」と名付けられる戦争は起きませんでした。しかし、いまこの瞬間も、パレスチナやウクライ

ナの人びとは、いつ爆撃されるかわからない、いつ家族や友人など愛する人の命が奪われるのかもわからない、そういった暮らしを強いられています。

戦争や紛争、テロがなければ平和だとは限りません。たとえばサハラ砂漠よりも南のアフリカ（サブサハラアフリカ）や南アジアなどでは毎日8億人が飢えて床に就き、そのうち3億人以上が子どもです。3.6秒ごとに1人が餓死し大多数が5歳以下の子どもです。著しい貧困状態にある人びとは十分な食料、清潔な水、必要な医薬品などを得ることが困難です。性的マイノリティの人びとに対する差別や迫害もあります。70以上の国で同性愛が犯罪と定められています。たとえばブルネイでは、2019年、同性間の性行為には石打ちによる死刑を課すという刑法が施行されました。ウガンダでも2023年、性的少数者制限法が成立し、同性愛者だと自認しただけで犯罪者となり、性交渉した場合には死刑になる恐れがあります。性自認や性的嗜好だけでなく、人種や民族、国籍、職業や出自、障がいの有無など、さまざまな属性で、偏見や差別に怯えなくてはならない人びとも、やはり、戦争や紛争、テロがなくても平和に暮らしているとは言えません。

東西冷戦が終結し、東ヨーロッパがEUに加入すると、東ヨーロッパから西ヨーロッパへの人の移動が起きました。人や物、お金、情報などが自由に国境を越えて移動すること、そしてその影響をグローバリゼーション（グローバル化）といいます。グローバル化によって、企業は国際競争力を高めるということを名目に、より安い労働力のある国や地域に進出したり、より安い労働者を受け入れたりするようになりました。それまでは豊かな北の先進国と貧しい南の途上国の間の格差が問題とされてきましたが、豊かだったはずの北の先進国のなかで格差が目立つようになっていきます。グローバル化は市場による見えざる手による資源配分がもっとも効率的であると強く信じ、政府の介入を極力排除しようとする新自由主義的な経済が地球規模で拡大することでもあります。たとえば労働市場における規制緩和政策は、有期雇用や派遣労働を拡大させました。非正規雇用労働者は、ボーナスや昇給もなく、短期雇用でいつでもやめさせられる、安く使い捨てられる労働者として扱われるようになりました。国家による福祉、公共サービスを縮小させた結果、富裕層に所得が集中したり、教育格差が拡大したり、格

差の固定化が進んでいきます。人びとの一部は、ある集団への支援が行き過ぎているから、自分は働いても働いても貧しい、自分たちが置き去りにされているのだと考えるようになります。ある集団というのは、海外で栄養失調や飢餓に苦しむ子どもたちかもしれません。性的マイノリティかもしれません。職業や出自で差別されてきた人びとかもしれません。障がい者かもしれません。そして外国人かもしれません。

ソーシャルメディアで、自分たちと似た意見をもつ人をフォローすれば、閉鎖された空間で音が反響するエコーチェンバーのように、同じ意見が繰り返され、ほかの意見に触れる機会が減ってしまいます。過去の検索や行動履歴、興味にもとづいて表示される情報が最適化され、まるで泡のなかに閉じ込められたかのような状態になる、いわゆるフィルターバブルの状態に置かれてしまうかもしれません。加えて、情報過多な高度情報化社会においては、アテンションエコノミー、つまり人々の注目や関心が経済的な価値をもつようになり、時として情報の正確性や倫理性はおざなりにされます。たとえ情報が正確でなかったとしても、もしかしたらデマだったとしても、そして自身が意識していなくても、自分のなかにある偏見や差別意識が強化されたり増幅されたりしてしまうのです。こうして世界中のいたるところで分断や不寛容が拡大していきます。暴力につながることもありますが、自分に正義があると信じてしまうと、歯止めも効かなくなります。

では、どうすれば分断や不寛容を乗り越えられるのでしょうか。ある心理カウンセラーは、不寛容は自己防衛の反応の一種だと述べています。精神的なプレッシャー、ストレスがかかりすぎると、良き人であろうとする余裕や客観性を失い、自分のことで精一杯になりがちです。他者に配慮しなくてはならない、異なる人びと、異なる文化をもつ人々と共存しなくてはいけないという考えが、更なるプレッシャーになってしまいます。ある精神科医は、人間が自分と違うものを阻害しようとするのは、他者より優位に立っていたいという心理が関係していると説明します。ただ、優位に立ちたいという感情が他者を攻撃するわけではありません。自分の気持ちにゆとりがあり、満足している状態では攻撃性がなくても、ストレスがあると、自分よりも下に見える人を蔑んだり、攻撃しようとしたりします。つまり人は、プレッシャーやストレ

スを感じたときに不寛容になるということになります。

そうだとすれば、どうすればプレッシャーやストレスを少なくできるのでしょうか。わたしはかれこれ30年以上インドネシアに関わってきました。カルチャーショックから学ばされることも多くありました。人と会う約束をしたとき、仕事の締め切りを確認したとき、アラビア語で「神が望むならば」という意味の「インシャーアッラー」と言う言葉が返ってきます。約束に来てくれるんだろうか、仕事の締切守ってくれるんだろうか、と不安になります。しかし、すべては神の思し召しだという考えは、人生のなかで必ずあることですが、どんなに努力をしてもうまくいかないときに気が楽になれそうな気もします。

もう一つご紹介します。わたしは、日本で暮らすインドネシア人の相談を受けているのですが、本当に苦労して支援し、深刻な問題がようやく解決したとき、「神のおかげで」「神に感謝」という意味の「アルハムドゥリッラー」と言われることがあります。このときも「神ではなくて、わたし（のおかげ）でしょ？」と、ついつい突っ込みたくなってしまいます。同時に、人に迷惑をかけてはいけない、一人でしなくてはいけないという文化で育ち、もし失敗したら自己責任と言われてきたわたしにとっては、精神的なプレッシャーを抱えて生きていくよりも、人ではなくて、神に助けてもらったのだという考えのほうが、自分の弱さを見せて助けを求めやすいようにも思えます。弱さを見せられるということは、「自己肯定感」という言葉で置き換えてもいいかもしれません。自分のダメな部分、弱い部分、できない部分を肯定しているからこそ、弱さを見せられるからです。そして自己を肯定的に捉えることで、他者を受け入れやすくなり、多様性を受け入れる余裕が生まれるとも言われています。

今日の聖句「あなたがたは地の塩である。あなたがたは世の光である。」を思い出してください。塩も光も、なくてはならないものです。人は誰でもなくてはならないかけがえのない存在であり、ありのままのあなたが素晴らしいのです。分断や不寛容を乗り越え、より平和な社会をつくっていくために、ともに地の塩として、世の光としてあり続けてください。

（さえき なつこ　国際文化学部教授　2025.7.22　しろとり平和を願うチャペルアワー奨励）

新入生の皆さんへ

敬神愛人

（創立者 F.C.クライン）

「先生、律法の中で、どの戒めが最も重要でしょうか。」イエスは言われた。「**『心を尽くし、魂を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい。』**これが最も重要な第一の戒めである。第二も、これと同じように重要である。**『隣人を自分のように愛しなさい。』**

（新約聖書 マタイによる福音書 22 章 36～39 節）

新入生の皆さん、ご入学おめでとうございます。これから皆さんは、この名古屋学院大学でのキャンパスライフを過ごしていくことになります。その上で、この大学の一員となった皆さんにぜひ知っておいていただきたいことを簡単にお伝えしたいと思います。

私立の学校には、独自の理念、「建学の精神」というものがあります。名古屋学院大学の建学の精神は「敬神愛人」です。これは、キリスト教の聖典である「聖書」の言葉に由来しています。

敬神 … 神を愛し敬うこと。

愛人 …“隣人”を自分のように愛すること。

イエス・キリストは、この二つを大切にしなければならないと人々に教えました。隣人とは、近しい人だけでなく自分以外のすべての人を指すと理解されます。神は私たちを愛してくださっています。その愛をもって、私たちは神を愛し敬い、また隣人愛として他者のためにも愛を向けていく。これを本学の教育の基本にしているのです。

1883 年、アメリカからフレデリック・チャールズ・クライン（F. C. Klein）という宣教師が、キリスト教の伝道と英語教育を目的として来日しました。彼は、横浜に英語学校や教会を設立し、1887 年、次の着任地として妻メアリーとともに名古屋にやってきました。彼らは、名古屋に着いたその日から英語の学校を開いたと伝えられています。その時、クラインがその教育の基本理念として掲げたのが、「敬神愛人」だったのです。

「名古屋英和学校」と名づけられた彼らの学校は、1951 年、「学校法人 名古屋学院」と名称を改め、そして 1964 年、わたしたちの名古屋

学院大学が誕生することとなります。

新入生の皆さんは、これから数年の間、本学の学生として様々なことを学んでいくことになりますが、勉学や研究、課外活動に勤しむのと同時に、本学の建学の精神「敬神愛人」という言葉を心に留めつつ、人間的に成長していくこともぜひ目標にしてください。
皆さんが、自分自身のことも大切にしつつ、他者を愛していくことができますように…。また、人間同士のかかわりだけでなく、人知を超えた存在に心を向けられるような謙虚で広い視野を持った人間性が、この大学でのキャンパスライフを通して養われていきますように…。

◆ チャペルへの招き ◆

各キャンパスに設置されている「チャペル（礼拝堂）」では、毎週、「チャペルアワー」というキリスト教の礼拝を行っています。聖書の御言葉と祈りを中心に、教職員や近郊の牧師さんたちによる奨励を聴くひと時です。チャペルアワーを通じて、世界の大きな文化の源流の一つである「キリスト教」という宗教の教えに触れ、これからの時代を生きていく上で大切な何かを感じていただければと考えています。

＜名古屋キャンパス	火曜日	13：00～13：30
しろとりチャペル＞	木曜日	12：30～12：45
＜瀬戸キャンパス チャペル＞	水曜日	13：00～13：30

チャペルや付設のキリスト教センターでは、チャペルアワーの他にも、学生活動や聖書研究会、宗教講演会、コンサートなど様々な行事を行っています。詳細はキリスト教センターの掲示板をご覧ください。

チャペルの開館時間は、原則、平日の「8 時 45 分～16 時 45 分」です。皆さんのための空間ですので、最低限のマナーは守りつつ、気軽に利用してください（大声でのおしゃべり、飲食はご遠慮ください。）
ピアノは練習のためであれば使用可能です。また、パイプオルガンの使用については、必ず事前にキリスト教センターにご相談ください。

チャペルの中で静かに自分と向き合い、語りかけ、そして内なる声に耳を傾けるとき、新しい導きをそこに見出したり、また何か発見があるかもしれません。ぜひ、チャペルに足を運んでみてくださいね。

チャペル・ブックレット

宗教部では今までの「宗教講演会」等のお話をブックレットにまとめています。ご希望の方は、キリスト教センターへお問い合わせください。大学ホームページからもPDFファイルでご覧いただけます。

№1.「経済の論理と人間の論理」（塩沢 美代子）
№2.「心を問い続けて」（谷 昌恒）
№3.「国際化時代におけるキリスト教の使命」（徐 洗善）
№4.「激動化する現代史と神のみことば」（池 明観）
№5.「生きることの感動」（金 纓）
№6.「生きるよろこび」（村田 佳寿子）
№7.「心を支えているもの」（山本 将信）
№8.「主の愛この眼にありて」（武岡 洋治）
№9.「日本におけるキリスト教主義大学の使命」（池 明観）
№10.「いのちを支えるホスピスケア」（相木 哲夫）
№11.「天と地のひびき」（小塩 節）
№12.「絵本のちから」（松居 直）
№13.「ハイジ、クララは歩かなくてはいけないの？
－こどもの物語と聖書に見られる<しょうがい者＞差別－」
（荒井 英子）
№14.「お父さん、僕はなに人？一問（はざま）から読む聖書－」（金 永秀）
№15.「人権・生命の尊厳一野宿生活者の現場から-」（松本 普）
№16.「地球に、そして日本に生まれて今ここにいる」（太田 信吉）
№17.「メイク・ア・ウイッシュ～夢の応援団」（原 順子）
№18.「人間関係を生きる知恵」（島 しづ子）
№19.「命のことば」（水谷 誠）
№20.「宗教が戦争の原因？ 一神教がアブナイ？」（桃井 和馬）
№21.「福田敬太郎――神に向き合った生涯」（小野 静雄）
№22.「F.C.クラインと『敬神愛人』」（黒柳 志仁）
№23.「祈りつつ学び、感謝しつつ働く
－内村鑑三、名古屋英和学校赴任のころ－」（葛井 義憲）
№24.「NHK連続テレビ小説『エール』とキリスト教
キリスト教主義大学が大切にしたいこと－『敬神愛人』（西原 廉太）
№25.「『迷い出たダンゴムシのたとえ』がわたしたちを生かす」
（早瀬 和人）
№26.「中山間地のソーシャルワーク」（越智 祐子）
№27.「キリスト教学校が大切にしてきたこと－神の言葉はとこしえに立つ－」
（神山 美奈子）
№28.「僕と歌と教会」（陣内 大臓）

麦粒／第147号 2026.4.1 発行 名古屋学院大学キリスト教センター
〒456-8612 名古屋市熱田区熱田西町１番25号 ☎〈052〉678-4096